

〔特別展によせて 2〕

シルクロードの絵画 出陳品紹介

今回の特別展で陳列します中国西域の壁画や絹絵等については日頃眼にする機会が少ないと思われるので、挿図に使用したものを順に簡単な説明を行ないます。

なお、シルクロードに関する図書は様々なものが多数出版されていますが、敦煌を除けば、西域の絵画について一般向きに書かれた本はあまり多くありません。なかでは「週刊朝日百科 世界の美術 87 中央アジアの美術」(1979年、朝日新聞社)が、現在の一線の美術史家が執筆しており、また今回展示される作品も多数含まれていることもあってお薦めできます。

〔ミラン出土 有翼天使像 東京国立博物館蔵〕大谷探検隊将来自品。天山南路南道の東方より、タクラマカン砂漠の東に位置するミランの3、4世紀頃の寺院址のフレスコ壁画断片です。はるか西方に起源する天使形がグレコ・ローマ風の表現で描かれており、作者もローマ文化圏の画家と考えられています。

〔ベゼクリク出土 衆人奏楽図 東京国立博物館蔵〕大谷探検隊将来自品。トルファン近郊のベゼクリク(美しく飾られた場所という意)石窟より六つに分割され運び出された、縦横とも1mを越える、日本所在の西域壁画中もっとも大きな、9世紀の壁画断片です。人種、年齢の異なった楽人が笛、打楽器、弦楽器を演奏する、暖色系の彩色の、にぎやかな絵ですが、塑造の仏涅槃像の周囲を飾っていた壁画の一部と推定されています。

なお、この作品の展示期間は半期です。
〔敦煌出土 十王経 久保惣記念美術館蔵〕紙本著色。重要文化財。十王は冥府にあって亡者の罪業を裁く十八人の王のことで、仏教と道教の習合により、唐末頃に成立し、

朝鮮や日本でも広く信仰されました。敦煌出土の十王経図巻は何本かありますが、本巻が最も内容が完備しています。絵は15図あり、全巻の長さは12mを越えます。挿図は巻頭の釈迦説法図の部分です。巻末に「辛未年」の墨書があり、五代の911年あるいは北宋の971年とする二説があります。なお、敦煌出土の古文書や画は、敦煌での出所が不明なものが多く、そういったものは内容から敦煌本であることが確かでも、厳密には伝敦煌出土ということになります。

なお、この作品の展示期間は後半の2週間です。

〔クチャ出土 舍利容器 東京国立博物館蔵〕クチャは天山南路北道のほぼ中央にあり、近郊にはキジル千仏洞やクムトラ千仏洞があります。大谷探検隊の収集品の多くがそうであるように、この舍利容器も具体的な発掘場所が分からず、資料としての価値を減じていますが、中央アジアから発掘されたものの中で最も美しく、美術的に最も価値あるものの一つと言えますでしょう。

しかし、発見から約半世紀の間はあまり注目されませんでした。なぜなら現在見ることの出来る表面の上に厚く上塗りがかかれており、単純な装飾しか施されてなかったからです。後に表面の顔料をはぎ取ったために、本来の装飾画が蘇ったのです。

木地に麻布を貼り、鮮やかな彩色と金銀箔を使って、音楽を奏で、舞踊する人々や天使などを伸びやかに描いています。また表面には透明な油性塗料が塗られていることが指摘されています。正倉院宝物の密陀絵の手法と同じです。

この舍利容器の制作年代は6世紀から7世紀ごろとされています。

部分図の笛を吹く天使は、ミ-



キジル出土 ドロナ像 (東博)



◎アスターナ出土 樹下人物図(東博)



アスターナ出土 伏羲女媧図(天理参考館)

ランの天使と異なり、裸形で首飾りを掛けています。天使を囲む円形の連珠文はササン朝ペルシアの意匠で、トルファンで発見された染織品にしばしば見られ、また正倉院の染織品や法隆寺の獅子狩文錦にも使用されています。

なお、この作品は展示期間が2週間に制限されています。

〔キジル出土 菩薩像頭部〕ル・コック将来自品。クチャ周辺の石窟寺群を代表する遺跡である、キジル千仏洞を最初に訪れたのは、1903年の第1回大谷探検隊員の渡辺哲信、堀賢雄両氏ですが、最も精力的に調査と発掘収集を行なったのはル・コック(1860~1930)らのドイツ隊でした。

この作品は、彼によってベルリンに運ばれ、第一次世界大戦後のインフレのさなか、調査報告書を作成刊行するために売却され、世界各国に散った収集品の一つです。この時ドイツから出たキジル壁画断片は、現在、70点以上確認されていますが、それでも総数の半分以上と推定されています。これらには裏打ちの石膏に覚書があり、発掘された洞が分かります。この図は、ドイツ隊によって日本人洞と名づけられた、7世紀ごろの壁画の断片です。

キジル壁画は、ラピスラズリを多用した、鮮やかな青色や緑色を特徴としますが、本図の光背や頭

飾りなどは明るい緑色で塗られ、豪華な雰囲気を与えています。この作品に限らず、今回の展示品は鮮やかな彩色が施されたものが多く、実物をご覧になると驚かれるのではないのでしょうか。

〔敦煌出土 地藏菩薩水月観音図

藤井有鄰館蔵〕敦煌の絹絵は今回、この作品の他2点を予定しています。一つは白鶴美術館所蔵の五代後唐の天成四年(929)銘の薬師如来像、もう一つはフランスのペリオ(1878~1945)が敦煌より将来し、ギメ美術館より東京国立博物館に寄贈された菩薩像幡です。後者は、ふきながしを思わせる足とその押えの木板が揃った保存の良いもので、仏殿の柱や天蓋に掛けられた荘厳具の一つである幡の形を良くとどめています。また、同じくギメ美術館寄贈の麻布に描かれた大幅の二菩薩立像も東京国立博物館からお借ります。

白鶴美術館の作品や麻布の二菩薩立像やこの京都の藤井有鄰館のものは、元来奉納のために窟寺の壁に掲げられたもので、いずれも画面下部に敷物に座った寄進者が描かれています。この図は左に浄瓶と楊柳を持った水月観音を、右に地藏菩薩を配す珍しい図様を示していますが、こうした組合せは放光菩薩と呼ばれます。

〔キジル出土 ドロナ像 東京国立博物館蔵〕キジル千仏洞第3区

マヤ洞より大谷探検隊が将来した7世紀の壁画断片です。ピザンチンのモザイク画のキリストを思わせるこの人物は、釈迦入滅後、八人の王がその舍利の分配をめぐる争ったときに、調停役を果たしたバラモンのドロナで、手にしているのは舍利容器です。この像の周囲の分舍利図の残りが、ル・コックによりベルリンに運ばれましたが、第二次世界大戦で破壊されてしまいました。しかし、幸いなことに模写が日本に残っており、今回、東京大学文学部よりお借りして、ドロナ像とあわせて展示いたします。

[アスターナ出土 樹下人物図 東京国立博物館蔵] 紙本着色。重要文化財。清朝末期の新疆省の高官の旧蔵品で、トルファンの墓所アスターナ出土と伝えられています。この絵の裏張りに戸籍帳の反古が使われており、それらの年紀から盛唐期の730年頃の制作と考えられています。この絵と対あるいは一連のものとなる、大谷探検

隊将来の樹下美人図(MOA美術館蔵)は残念ながら、作品の傷みがひどいためにお借りすることができませんでしたが、精巧な模写(MOA美術館蔵)を代わりに展示いたします。

なお、この作品も展示期間が2週間に制限されています。

[アスターナ出土 伏羲女媧図 天理参考館蔵] 大谷探検隊将来品。伏羲女媧は中国古代神話上の人首蛇身の配偶神で、男性の伏羲は規矩(ものさし)を持ち、女性の女媧はコンパスを持っています。図様としては古く漢代の画像石に見られ、アスターナからは6世紀半ばから8世紀半ばの絹絵が数多く出土していますが、大谷探検隊は10点将来し、現在ソウルの韓国中央博物館に3点、中国の旅順博物館に2点、龍谷大学に4点、天理参考館に1点所蔵されています。本図は比較的古い様式を示し、7世紀前半の作品と推定されます。

なお、この作品は展示期間が制限されています。(藤田伸也)